

●研究ノート

新疆ウイグル自治区の特有群体「民考漢」——ウルムチ市のウイグル人を事例として

希日娜依・買蘇提 大谷順子

前書き

中国西部の新疆ウイグル自治区には多くの民族が居住している。その中でウイグル人は最も人口の多い民族である。二〇〇八年の統計では、ウイグル人の人口は九八三万一八〇〇人で、新疆ウイグル自治区総人口の四六・二四%を占める。主に天山山脈以南、崑崙山脈以北の各オアシス地域に居住している。特にカシュガル、ホータン、アクスの三つの地域ではウイグル人の人口比率が高い⁽¹⁾。

ウイグル語はアルタイ語系突厥語族に属する。かつてはウイグル人独自の文字を使用していたが、現在はアラビア文字をベースにしたウイグル文字を使用している。ウイグル人は独特な風俗習慣と文化伝統を持っている。歴史的にトーテム崇拜、シャーマニズム、ゾロアスター教（拝火教）、マニ教、部分的にキリスト教などを信仰してきたが、現代では、イスラム教⁽²⁾を信じるようになった。

現在、新疆では、初等教育の授業で使用する言語によって、

基礎教育段階の学校を三種類に分類している。一つ目は「民族学校」、二つ目は「漢族学校」、そして三つ目は「民漢合校」である。民族学校についてリズワン・アブリミティは「新疆には、ウイグル語以外に四つの言語、すなわちカザフ語、モンゴル語、シボ語、キルギス語を教授言語とする「民族学校」もあり、原則としては、小学校の段階から各民族を児童・生徒とし、それぞれの民族言語を教授言語とする学校のことを「民族学校」と称している。その大部分で、ウイグル語による教育が行われてきた」と述べている⁽³⁾。

「漢族学校」とは中国語の標準語（普通話）を授業使用言語として用いる学校のことを指す。漢族の子供たちは普通このような学校に通う。「民漢合校」とは、同じ学校内で、ウイグル語を授業使用言語とする「民族クラス」もあれば、中国語を授業用言語とする「漢族クラス」もある学校のことを指す。二〇〇四年から、新疆ウイグル自治区党委人民政府が「バイリンガル教育推進の決定」を発表し、新疆では基礎教育段階の学校はほとんどが民漢合校となった⁽⁴⁾。このことは、かつてのウイグル

語による教育形態から中国語による教育形態に変わったことを意味する^⑤。

一般に、少数民族の子供たちは民族学校に通い、漢族の子供たちは漢族学校に通っている。一方で、一部に、漢族学校に通う少数民族の子供もいる。幼少期から漢族学校で勉強し、高校卒業後に中国語の大学入学試験^⑥を受験する少数民族の受験生は「民考漢」と呼ばれている。これに対して、小学校から民族学校に通い、高校卒業後に民族言語の大学入試を受ける受験生は「民考民」と呼ばれる。改革開放が進むにつれて、一九九〇年代初めから、民考漢の人数は以前より多くなっている。民考漢の学生は言語的に優位にあるため、進学、就職および職務の昇進などにおいて、民考民の学生より競争力がある。職場でも優位な役割を果たしており、結果として影響力は民考民出身者よりも大きい。民考漢は、人数的にまだ少数だが、民考民と比べて、言語、文化的な帰属、民族心理、結婚家族などにおいて独自の特色が形成されている。社会的要因についてみても、民考漢と民考民との間にさまざまな違いが見られる。そこで、これらの差異に起因する課題について、希日娜依・買蘇提は一九九八年三月～二〇〇〇年五月にかけて、ウルムチ市在住の一部のウイグル人の民考漢と民考民を対象にフィールド調査を行い、そのデータを用いて、民考漢の出現と展開、民考漢の言語使用の状況、民考漢の結婚観、他民族の民考漢への見方などの問題について幾らかの論文^⑧を発表した。

民考漢現象は二〇〇〇年前後から研究者らの関心を集め、関

連の論文が発表されるようになった。

まず、李曉霞 [2000] は、少数民族の学生が漢族学校に入学する現状と発展状況などを説明した。漢族学校に入学して勉強する少数民族が急激に増加すると少数民族の母語を喪失する心配がある。そのため、子供の学校選択を迫られた親は、漢族学校か民族学校のどちらを選択すべきかというジレンマを抱える。李曉霞は、漢族学校に入るかどうかは本人の意思を尊重すべきで、政府としても必要な設備を提供すべきであるが、政策的な誘導なしに自然の成り行きに任せるべきであろう、とする。

また奥邁尔・地木拉提 [2001] は、言語使用、民族意識、民族感情、民族文化、そして結婚家族などの方面から、新疆の「民考漢」とカザフスタンの「民考俄」（ロシア語で学ぶ非ロシア人^⑨）の簡単な比較を行った。郭衛東と黄莉 [2007] は、その調査によると、民考漢学生の学習成績は、学年が上がるにつれて、漢族学校の全体的なレベルとの差が次第に縮小する傾向にあると報告している。民考漢学生は漢族学校において、適応能力が徐々に向上していると理解される。米海古麗・司馬義 [2008] は、社会言語学の角度からウイグル人民考漢の間の言語記号転換機能の分析を行い、全部で八種類の言語記号転換の現象と機能についてまとめた。祖力亜提・司馬義 [2009] は、社会学的な視点から新疆の民考漢という特殊なアイデンティティ（中国語で「認同感」）の形成について論じた。この論文では、学校教育において民考漢の中国文化のアイデンティティおよび族群のアイデンティティが二重に強化されたと指摘す

る。すなわち、民考漢という群体(グループ)の文化的な特徴が弱まったことは民族のアイデンティティの消滅につながるとは限らない、とする。日本でも民考漢に関する研究論文として、坂元・希日娜依 [2006]、藤山 [2010] がある。

本稿では、一九九八年三月～二〇〇〇年五月にかけてウルムチ市で計四〇〇名のウイグル人「民考漢」と「民考民」に対して行った調査のデータと資料を用いて、まず新疆ウイグル自治区に特有の群体である民考漢という概念およびその発展について述べ、次に民考漢の母語使用能力および中国語使用能力への自己評価、民考漢の言語使用状況について論じ、さらに結婚・家族意識、ウイグル人と漢族の視点から見た民考漢などを系統的に取りあげて分析する。民考漢の研究は、新疆ウイグル自治区における民族教育の多元的な発展、継承および民族の文化の発展、異なる民族の文化との触れ合い、交流などの問題を研究するうえでも重要な意味を持っている。

一九九八年から二〇〇〇年にかけての調査データを用いたのは以下のような背景とかかわっていたからである。一九九〇年代以降、新疆では西部大開発により漢族がさらに大量に流入するようになり、少数民族にとつては「中国語能力」で劣ると雇用でも不利となる事態がますます顕著になっていった。新疆における漢族の人口は、一九四九年に三〇万人であったのが、一五年後の一九六四年には二三〇万人、五〇年後の一九九九年には六八七万人、六〇年後の二〇〇九年には八〇〇万人以上となっている。ウイグル語は、ウイグル人社会において、まだ家

庭の日常生活をはじめとして支配的な地位を維持しており、ウイグル人同士ではウイグル語を用いる。しかしその一方で、政治的な場面や都市における社会生活の面では、漢語の使用が優先されている。これは、政策的な移住により漢族の人口が増加し、政治面・経済面で優位に立ったことによるものであり、近年では、就職を有利にする必要性から、漢語の習得がウイグル人の間で重視されている。政府の言語政策についてみれば、民族学校における漢語教育は、建国後に開始され、七〇年代から普及が展開され、八〇年代から強化された。さらにウイグル人の就職状況を改善するという目標を掲げて、ますます漢語教育の導入を進めた。一二世紀に入ってからには、「民族区域自治法」が改正され、双語教育の開始年齢が引き下げられるなど、教育の場における言語政策と状況は急速に変容している。このような背景の下、漢語学校に通う民考漢の子供たちはますます増えており、今後ウイグル人社会において主な集団を形成していく可能性も十分に考えられる。しかし、前述のように、民考漢は進学、就職および職務の昇進など社会的なステータスの面において多くの成功を遂げている一方で、いろいろな問題を抱えていることも事実である。こうした状況について今後さらに追跡調査を行う必要性が求められるが、一九九八年から二〇〇〇年のデータを用いることは、まさにその過渡期の時代をとらえる意味があり、本稿では、意図してその時代に焦点を当てている。

ウルムチ市を調査地として選んだ理由は、新疆ウイグル自治

区の人民政府が設置されており、漢族が中心の多民族居住の都市だからである。二〇〇八年の統計によると、ウルムチ市の総人口数は二三六万五〇〇人、ウイグル人の人口は二九万九一〇〇人、漢族の人口は一七二万三四〇〇人で、それぞれ総人口の一・七%と七三・〇%を占める。ウルムチ市のウイグル人は子供を漢族学校に入學させることが普通であり、ほとんどの学校と職場で民考漢が見られる。調査の期間と条件に制限があるため、ウルムチ市のウイグル人の民考漢を調査対象として確定した。民考漢という概念は漢族学校教育を受けるウイグル人、カザフ人、モンゴル人、キルギス人、タジク人、ウズベク人、シボ人、ダフル人、タタール人、チベット人、ロシア人など一の少数民族に存在する。本稿ではこれらの中でウルムチ市のウイグル人の民考漢について述べる。

一 民考漢とは何か

(一) 民考漢の概念

「民考漢」とは、少数民族の言語、中国語、そしてそれら言語による大学入試と関係がある。民考漢とは、新疆のウイグル人、カザフ人、モンゴル人、キルギス人、タジク人、ウズベク人、シボ人、ダフル人、タタール人、チベット人、ロシア人など一の少数民族のうち、小学校、中学校、高校は漢族学校で教育を受け、高校卒業後、全国統一の中国語による大学入試^⑬を受ける学生のことを指す。

民考漢という言葉は一九八二年から使用されるようになった。「新疆学生募集二十年」には、一九七七～一九九七年の「新疆高校学生募集業務のまとめ」など二〇篇が収載されている。そのうち一九七七～一九八一年のものには「中国語入試に参加する少数民族受験生」という言葉が使用されている。「民考漢」という語彙は一九八二年に初めて使用された。一九九八年、崔師憲は「学生募集計画の体制の改革と発展」という論文において、民考漢とはウイグル人、カザフ人、モンゴル人、キルギス人、タジク人、ウズベク人、シボ人、ダフル人、タタール人、チベット人、ロシア人など一の民族の中で、小・中学校では中国語で勉強し、高校卒業の後、中国語の大学入試に参加する受験生であるとして、初めて定義づけた。それ以降、民考漢という言葉が次第に使われるようになり、現在では漢族学校で勉強する少数民族の学生を意味する用語として定着した。

民考漢には二種類がある。一つ目は、小学校より漢族学校で勉強し、高校卒業後中国語での大学入試に通って大学で勉強し、卒業後就職する学生である。二つ目は小学校から漢族学校で勉強し、中学校または高校卒業後すぐに就職する学生である。小学校または中学校の一部の期間を漢族学校で勉強し、小学校または中学校を卒業後に民族学校に転校して、高校卒業後、民族言語の大学入試を受ける事例については本稿の研究の対象としていない。^⑭

(二) 民考漢の発展

一九五〇年代中後期には民考漢は少数であった。新疆大学を退職した教員（女性）は五歳の時に両親と一緒に蘭州に行き、そのの漢族学校に通った。この教員の記憶によると、五〇年代の民考漢の数は確かに多くはなかったとのことである。一九五六年、五年生の時に新疆に戻り、ウルムチ市立第二十小学校、ウルムチ市第一中学校（ウルムチ一中）、第六中学校（六中）と第十四中学校（十四中）など民漢合校の中国語クラスで学んだ。一九六三年高校卒業後、新疆大学中国語学部で中国語クラスに入った。一中で学んだ当時、彼女以外にもう一人、中学二年のウイグル人の学生がいた。六中と十四中に在籍していた時には、ウイグル人学生は彼女一人しかいなかった。

六〇年代に入り、民考漢の人数は次第に増えた。奥邁尔・地木拉提によれば、六〇年代初頭に漢族学校に通った初期の少数民族の学生たちは、中学校・高校の教育を終え、さらに就学するために自治区内または内陸で大学に入った。大学に入らなかった学生たちは、社会に出て、中国語という言語能力で就職し、国の幹部または工場労働者になった。一九六四年に自治区教育庁は、新疆大学付属中学校（新大附中）、イーニン市第六中学校（イーニン六中）、カシユガル第二中学校（カシユガル二中）、ウルムチ市第六中学校（ウルムチ六中）など、中国語で授業する四つの学校において、少数民族向けに中国語で教えるクラスを設置することを決定した。一九六五年ウルムチ六中

では初級中学で試験的に二つの少数民族クラスを設置した。そして、このクラスの担当者を編成する際に配慮がなされ、民族クラスの学生のために「人民補助金」も引き上げられた。その後、少数民族の子供は直接漢族学校に通う人数が増えることになった。漢族学校を卒業しても進学できなかった学生のうち、大部分は後に通訳者になった。^⑮一九七〇年三月、自治区革命委員会の「自治区における「農牧区中小学校教育大綱」試行に関する通知」は、条件が揃った民族中学校では必要に応じて中国語クラスを附設することができ、中国語クラスは民族学生を募集することもできると規定した。^⑯六〇年代から七〇年代初頭にかけて、政府の政策的な誘導により、民考漢の人数は次第に増加した。

八〇年代になると、より多くの少数民族の学生を内陸の中国語で教える高校で勉強させ、少数民族の人材育成を進めるために、自治区教育庁は一九八四年七月に「民族学生が中国語の小学校、中学校で勉強する時のいくつか事項の通知」を伝達した。^⑰これは明らかに、より多くの少数民族の学生を漢族学校に入学させ、さらに進学させる条件を示していた。他に民考漢は大学入試における可否判定時にも一貫して政府の優遇措置を受けてきた。「自治区教育局一九八〇年新入生募集業務の追加規定」の第五条では、「党の民族政策を真剣に実行し、積極的に各民族の人材を選抜、育成するため、中国語の大学統一入試の時にウイグル人、カザフ人、モンゴル人、キルギス人、タジク人、ウズベク人、シボ人、ダフル人、タタール人、チベッ

ト人、ロシア人など少数民族の受験生に対して、ボーダーラインと合格基準点を下げる」と明確にしている。一九八四年から一九九七年にかけて、合格基準点は八〇～一五〇点下げられた。また漢族の受験生と同等の条件の場合には、少数民族の学生が優先された。つまり、大学、大専の入学者を選考する際、民考漢は優遇政策を受けてきたのである。一九八六年に実験学校の民考漢は文系、理系の受験生を合わせて一二名（男性六名、女性六名）おり、その全員がウイグル人だった。そのうちの二名が自治区内の新大和医学院に合格したほか、他の全員が内陸の大学に合格した。内訳は清華大学に一名、上海交通大学に四名、北京対外経済貿易大学に二名、北京師範大学、中央民族学院と西北民族学院にも各一名ずつ合格した。②③前述の政策的な誘導があった一方、社会の発展につれて、新疆の少数民族自身にとっても、中国語を習得する重要性が日増しに顕著になった。国内外の情報や新しい科学技術の学習、また職業活動や、職務の遂行などにおいて、中国語は重要な道具になった。そのため、民考漢の人数はウルムチ市で増加しただけでなく、ウイグル人が多く居住する南疆（南新疆）②④地区でも増える傾向を示した。

民考漢に対する認識の広がりに伴い、民考漢の人数は増加した。少数民族の子供を漢族学校に通わせるために、政府は誘導的な政策を実施した。次に、高等学校は学生を募集する際、優遇政策の実施によって民考漢の進学を保障した。他に、中国の社会経済が発展するにしたがって、新疆の少数民族にも中国語

を習得する重要性が顕著になってきた。特に、大中規模の都市では中国語の言語レベルが、仕事の獲得には強く影響する。民考漢は中国語の習得という言語的な優位により、民考民より幅広い就職のチャンスを得ることになる。よって、近年ますます多くの少数民族の家庭で、自分の子供を漢族学校に通わせるようになった。

二 民考漢の言語使用状況

新疆ウイグル自治区は多民族が居住しており、多言語、多文字の地域である。このような背景の中で、民族間の人的な交流は双語（バイリンガル）現象を形成する社会環境になった。民族間の交流が深まるにつれ、文化、宗教信仰、風俗習慣から言語にいたるまで、民族の間には親近感が生まれる。このような民族間の交流が双語が必要とされる素地となり、多言語を使用する状況が現れた。②⑤

ウイグル人の言語使用の状況は二つある。一つ目は日常生活の中で自然に中国語を習得、または学校の中国語教育を通して中国語を習得する状況である。ウイグル人で中国語に精通する双語の人は主に都市に集中している。二つ目は、ウイグル人が他の少数民族と雑居するなかで、他民族の言語も習得する状況である。②⑥

民考漢は子供の頃から漢族学校で勉強し、長年にわたり漢族と接してきたため、中国語の能力が高い。彼らのウイグル語と中国語を習得する状況はどのようなものか、またウイグル語と

中国語を使用する際にはどのような特徴があるのか、母語（ウイグル語）と中国語に対する言語態度（言語態度とは、個人のある言語の価値に対する評価およびその行動の傾向を指す。（四に後述）にはどのような違いがあるかなどの問題を明らかにするために、先に述べた一九九八年三月から二〇〇〇年五月に行った調査において個別インタビューをして、日常生活を観察し、彼らの言語能力や言語使用習慣、言語態度などの状況を調査した。

（一）民考漢の母語能力と中国語能力

1 母語能力に対する自己評価

表1からわかるように、五一・八％は母語を話せるが、書くことはできないと答えた。四四％は母語を書き、また話すことができる。そのうち一部の者は、読めるが書くことはできないと回答した。三・六％は書くことができず、話すことも難しいと述べた。

2 中国語能力への自己評価

同じく表1からわかるように、四二・二％は自らの中国語能力が普通の漢族より高いと答えた。四六・四％は自分の中国語の能力は同年齢の漢族と同じだと述べた。六・六％は自分の中国語能力は高いが、漢族には及ばないと述べた。自分の中国語の能力は普通だと答えた人はわずか四・八％である。以上からわかるように、民考漢という群体は自分の中国語能力に対しての評価は高いといえる。

調査の結果から、八三・六％の民考漢は入学する前にある程度中国語を習得している。そのうち少しなら中国語が理解できるのは三七・三％である。中国語が母語よりも上手なのは二〇・四％である。中国語と母語が大体同じレベルなのは二五・九％である。一六・二％は中国語を全く理解できない。これらの民考漢の三六・七％は、学校に入る前に幼稚園の中国語クラスに入っていた。一八・六％は民漢混合クラスに入っていた。教師は主に漢族であるため中国語の上達が早い。四・八％は民族クラスに入っていた。残りの三七・九％は幼稚園に行っていない。²⁶⁾

表1 民考漢の母語と中国語能力への自己評価

母語能力	人数	%	中国語能力	人数	%
書けないし話せない	1	0.6	同年齢の漢族と同じ	77	46.4
話せるが書けない	86	51.8	比較的高いが漢族に及ばない	11	6.6
話せるし書ける	73	44.0	普通	8	4.8
書けないし口頭での表現能力も高くない	6	3.6	普通の漢族より高い	70	42.2
合 計	166	100.0	合 計	166	100.0

出所：希日娜依・買蘇提 [2001：62]。

3 民考漢の母語と中国語の能力

前述の調査結果から、民考漢のうち半分の母語能力は口頭表現のレベルに留まって、民族言語の文字を読むことも書くこともできないことを把握した。口頭表現の能力は人によって差異がある。少数の者は流暢な母語で話すことができる。しかし、日常的な会話しかできない者もいる。また日常会話でさえ上手には行えない者もいる。母語を完全に理解できない人はごくわずかである。中国語の能力は平均的な漢族とほぼ同等である。ほとんどの民考漢の中国語の能力は、母語よりはるかに高いということがわかった。

(二) 民考漢の言語使用状況の基本パターン

- (1) 言語使用の熟練度により、^②双語熟練型と第二言語熟練型に分かれる。

双語熟練型とは母語と中国語を同じように上手に話せる者を指す。民考漢の中では双語熟練型は少ない。第二言語熟練型とは母語はあまり上手ではないが、中国語はかなり上手に話せる者を指す。民考漢の中では、中国語のレベルが母語のレベルよりも高い人が大多数を占める。

- (2) 習得した言語の種類により、双語型と多語型に分かれる。双語型は主に二つの言語に同時に精通する者を指す。ウルムチでは、大部分の民考漢は母語以外に中国語も話せる。多語型とは二種類以上の言語に同時に精通する者を指す。民考漢の中には、ウイグル語と中国語以外の少数民族の言語または外国語

(英語、日本語、ロシア語など)を話すことができる人もいる。

- (3) 習得した言語により、^③双語単文型または双語双文型に分かれる。

双語単文型とは二種類の言語の口頭表現とどちらか一種類の言語の文字に精通する者を指す。半分以上の民考漢は中国語の文字は習得したが、母語能力は口頭表現のレベルに留まっているケースが多い。ウイグル文字は読むことも書くこともできない。双語双文型とは二種類の言語の口頭表現および書面の文字にも同時に精通する者を指す。双文型に属する民考漢は数少ない。そして二種類の言語および文字の熟練度にも差がある。一般的に普段よく使う言語の文字はもう一方の言語の文字より熟練度が高い。

- (4) 双語の使用機能により、並列型と相互補完型に分かれる。並列型とは使用機能から見て二種類の言語間に明らかな差はない。いかなる場面でもどちらか一種類を自在に使用できる。このパターンの民考漢はウルムチ市ではごくわずかである。相互補完型とは二種類の言語がそれぞれ違う機能を果たしている。どの言語を使用するかは場面と社会環境によって決まる。民考漢は普通、家庭または自分の民族メンバーと交際する場合にはウイグル語を使用する。漢族と交際する時、または公共の場では中国語を使用する。

- (5) 言語習得のルートにより、非自然双語(非自然バイリンガル)型、自然双語(自然バイリンガル)型と混合型に分かれる。

非自然双語型とは、第二言語を習得する環境にはないが、学習や交際などの必要から、系統的な教育伝授により第二言語を習得した者を指す。このパターンはウルムチ市では少数である。自然双語型は、第二言語を習得するよい環境があり、頻繁に接触する中で第二言語を自然に習得でき、学校で正式に系統的な勉強をしたことがない者を指す。このパターンはウルムチ市でも少数である。混合型は、以上の二種類が互いに混合して補い合うものを指す。接触の中で自然に習得することもできれば、学校教育の中で系統的に勉強することもできる。このパターンがウルムチ市では大多数を占めている。

(三) 交際における民考漢の言語使用の特徴

学校教育と社会での一般的な交際の範囲において、大多数の民考漢の中国語のレベルは母語より高い。民考漢は自分の民族との密接な交際は大学に入ってから、社会に出ってから、または結婚後のことになる。その前に漢族とより多く接触する機会がある。民考漢の友人は民考漢と漢族が多く占める。民考漢は交流しあう時に中国語と母語を混合して使用するのが普通である。そして中国語の要素は母語より多い。

民考漢は漢族と会話する時に中国語を使っても何の言語的支障もない。話の中に母語が入り混じることはない。しかしウイグル人と会話する時には普通、ウイグル語と中国語を混ぜて話す。ウイグル語だけまたは中国語だけで会話する人もいる。

表2からわかるように、家族と交流する時に、圧倒的多数の

民考漢は母語を使用する（または少し中国語の語彙が混じる）。一方、多くの民考漢の母語能力は中国語に及ばないため、母語が最も便利としたのは少数である。母語の能力が不足していることがわかった。

民考漢が母語と中国語を混合して使用するのには以下のような状況がある。

- (1) ウイグル語を使っているが、文中に中国語の語彙、専門用語が入っている。
- (2) 中国語を使っているが、文中にウイグル語の語彙が入っている。
- (3) ウイグル語も使えば、中国語も使う。例えば、最初の文ま

表2 民考漢の言語習慣

家族と交流する時の言語	人数	%	交流する時に最も便利な言語	人数	%
母語を使う	77	46.4	母語	24	14.5
中国語を使う	3	1.8	中国語	40	24.1
母語をメインに中国語が混じる	69	41.6	母語と中国語が混じる	48	28.9
中国語をメインにいくつか母語が混じる	17	10.2	どちらも同じ	52	31.3
			回答なし	2	1.2
合 計	166	100.0	合 計	166	100.0

出所：希日娜依・買蘇提 [2001：64]。

たは前のいくつかの文はウイグル語で、あとは中国語を使う。またはその反対である⁽²⁸⁾。

(四) 民考漢の言語態度

「言語態度とは、個人のある言語の価値に対する評価およびその行動の傾向を指す。認識、情感と意向の二つの要素を含む。認識の要素はある言語に対する認識、理解および賛成か反対かを指す。情感の要素は言語的感情、好きまたは嫌い、尊重または軽視などを指す。意向の要素はその言語に対する行動の傾向を指している⁽²⁹⁾」と、張偉は述べている。

民考漢の言語態度とは、母語（ウイグル語）と第二言語（中国語）への態度を指す。

「どの民族でも、彼らの母語を認知、評価する時に、理性的な要素と情感的な要素をしっかりと織り交ぜている。ある時、情感的な要素の働きは理性的な要素よりずっと大きい。理性的な角度から見れば、ある一部の少数民族の言語の交際機能はますます限られてきている。しかし、自分の母語を、民族をアイデンティファイする標識、民族の文化を伝承するキャリアーとして見なす時に、どの民族でも自分の母語に対して強い情感的なアイデンティティを得る。一つの民族に対して、母語は交際する時のツールだけではなく、民族をアイデンティファイする象徴、民族の文化伝承のキャリアー、民族情感の拠り所でもある⁽³⁰⁾」と万明鋼は述べている。それでは、民考漢は自分の母語（ウイグル語）と中国語に対してどんな態度を持っているかを

見てみよう。

1 民考漢の母語（ウイグル語）への態度

民考漢がウイグル語を習得するための学習に対してどのような考え方を持っているかによって、彼らの母語への態度を考察する。表3から、九八・二％の民考漢は母語の学習が必要だと考えていることがわかる。七四・七％の民考漢は母語の学習が非常に必要だと考えている。ウイグル語はウイグル人が交際する時のツールだけでなく、ウイグル人のアイデンティティを認める象徴、文化伝承のキャリアー、情感の拠り所でもある。

民考漢は自分の母語に対して特に深い愛着をもち母語を失うことを恐れている。ほぼすべての民考漢は母語を保護したいと考えており、そこには情感の要素が働いている。

2 民考漢の中国語への態度

「双語人は第二言語を評価する時に、母語と比較することが多い。そして、二つの言語が属している文化様式、二つの言語が属している社会的なグループを比較する。それによって、第二言語への態度を決める。もし第二言語の社会的な機能が母語の社会的な機能よりも大きい場合、母語を使用するグループの

表3 民考漢の母語学習に対する考え方

選択項目	人数	%
非常に必要	124	74.7
必要	39	23.5
勉強してもしなくても同じ	3	1.8
勉強する必要はない	0	0.0
合計	166	100.0

出所：希日娜依・買蘇提 [2001：64]。

メンバーは一般的に第二言語に対して肯定的な態度をとる^①と、張偉は述べている。ウルムチ市では、中国語の社会的な機能はウイグル語よりも高い。したがって、民考漢は中国語に対して肯定的な態度を抱いている。民考漢は小さい頃から中国語での文化教育を受けてきたため、新しい情報を早く、そして多く得ることができると述べている。そのため知識を得て、また視野を広げることが可能となり、仕事に順調に運ぶことにも貢献する。現代社会により適応することができるようになったと多数の民考漢は考えている。現代社会では、中国語を学び、漢族の文化を理解することは重要だと多くの民考漢は考えている。このように自分の態度を選択する際に、客観的な認識の要素と同時に情感の要素が働きかけている。

三 民考漢の結婚と家族に対する意識

新疆のウイグル人社会で、結婚と家族はメンバーに対して非常に重要な問題である。結婚と家族の面において、民考漢には民考民と違う特徴がある。

民考漢の結婚、家族の状況にはどのような特徴があるか、また、民考民とはどのような区分があるのかについて、先にも述べたワールド調査とインタビュー（一九九八年三月から二〇〇〇年五月）の結果から、民考漢と民考民の結婚観と家族観を比較することによって、民考漢の結婚、家族の意識について考察する。

（一）民考漢の結婚観

表4からわかるように、結婚相手を選ぶ時の考えとして民考漢は民考漢を選んで結婚する傾向がある。半数の民考漢が、民考漢の方が気があうと考えている。言語、文化、価値観などの面において親近感を持ちやすい結婚相手を選ぶ傾向があるのは必然であろう。ただし、三二・五％の民考漢は民考民との結婚を希望している。多くの民考漢は言語、文化においては、漢化された傾向にある。しかし、年齢が高くなるにつれ、彼らの民族意識が次第に強くなり、民考漢は民考民と結婚し、家庭を作ることと自分の民族とのつながりを広げていきたいと考えている。さらに一二・〇％の民考漢については、民考漢でも民考民でも自分と同じ民族の人であれば結婚してもよいと考えている。五・四％の民考漢はどの民族と結婚してもよいと考えている。彼らは文化や生活様式に対して適応力が比較的高い。

調査の中で、二人の民考漢は、漢族と結婚したいが親が許可しないと回答した。この二人のうち一人は一八歳の女子学生で、友人の民族の割合では漢族が最も多い。そして彼女は漢族と一緒にいるとリラックスできると感じると話している。自分の民族の友人と付き合い始めたのは大学に入ってからのものである。もう一人の民考漢は大学を卒業して就職したばかりの二三歳の女性である。彼女は民考民とは共通の話題があまりないと述べた。民考民と結婚を前提に付き合いたい、母語能力が低い、ため付き合う勇気がないと回答している。

表4 民考漢の結婚観および実際の配偶者

年齢層		18-25 歳	25-30 歳	30-35 歳	35-40 歳	40-55 歳	合計	%
配 偶 者	選択項目							
	民考漢	0	13	14	16	20	63	38.0
	民考民	1	20	13	11	11	56	33.7
	漢族	0	0	0	1	0	1	0.6
	未回答	35	11	0	0	0	46	27.7
	合 計	36	44	27	28	31	166	100.0
結 婚 観	民考漢と結婚	18	18	12	14	18	80	48.2
	民考民と結婚	12	17	12	8	5	54	32.5
	漢族と結婚	2	0	0	0	0	2	1.2
	どの民族も同じ	2	2	2	2	1	9	5.4
	自分の民族と結婚する 民考漢でも民考民でもいい	2	7	1	3	7	20	12.0
	未回答	0	0	0	1	0	1	0.6
	合 計	36	44	27	28	31	166	99.9

注：配偶者のうち未回答の46人は未婚者。

出所：希日娜依・賈蘇提 [2003: 167]。

結婚相手を選ぶ考え方について民考漢と民考民とに差異が確認できる。民考漢の中で民考民または他のどの群体（グループ）の人と結婚してもよいと考える人は四四・五％を占める。民考漢と結婚したい人は四八・二％を占める。民考民の中で民考漢または他のどの群体の人と結婚してもよいと考える人は六〇・九％を占める。民考民と結婚したい人は三七・一％である。民考漢と民考民の二つの群体のうち、同じ群体内で結婚したいと考える人の比率は、民考漢のほうが民考民よりも高い。

民考漢の配偶者の半分以上は民考漢であり、次に民考民である。漢族の配偶者は〇・八％である。

結婚観から見れば、民考漢は民考民と次の二点が違う。(1)民考漢の場合は群体内で結婚したいと考えている。大多数の民考漢は、配偶者が民考漢であれば最も気があうと考えている。そして、半数近くの民考漢は自分の民族のメンバーと比較的に密接に付き合い始めたのは社会に出てからのことである。それまで彼らは普段漢族か自分と同じような民考漢との付き合いが多かった。漢族と結婚することができないため、比較的良好に付き合える民考漢グループの人と結婚するのが普通である。さらに現代では、若者の多くが学生時代に恋愛を経験している。他に民考漢を選ばない理由としては、民考民との文化的なわだかまりがあることも関係している。(2)ごく少数の民考漢は他民族と結婚したいと考えている。しかし、伝統的な考え方が色濃く、保守的な勢力が強い新疆ウイグル民族社会の中で、このような一歩を踏み出すことは民考漢に対しては非常に勇気のいる行動

である。もし彼らが他民族との婚姻を選んだら、自分の民族内の親族ネットワークは自分の民族社会の中で地位を維持するのが難しくなる。同時に配偶者（夫または妻）の親族ネットワークも地位を維持するのが難しくなると言える。このようにさまざまな理由から、ほとんどの人は自分の民族群体内で結婚している。

(二) 民考漢の家庭観

ここでは民考漢と民考民の理想の家庭の規模、理想の家庭の形式、結婚前に貞操を失うこと、再婚への態度などの問題を通して、民考漢の家族に対する考え方について考察する。

1 理想の家庭の規模

理想の家庭の規模とは結婚後の家族の人数のことである。核家族を主張する民考漢が圧倒的に多い。その中で民考漢の理想の家庭の規模は四大家族を望む人が多い。三大家族が理想の家族の規模だと考える人もかなりいる。血統を継ぐことが結婚後の家庭の主な責任ということがわかる。ここで注意しないといけないのは、結婚後、夫婦二人だけの家庭を選ぶ民考漢の数は民考民よりずっと少ないことである。夫婦二人だけの家庭は伝統的な家庭観とは全く異なる。新しいものを受け入れるには民考民より民考漢のほうがずっと速くて多いのだが、この点においては彼らの伝統的な一面を窺うことができる。

2 理想の家庭の形式

社会、時代、民族によって家庭の形式も異なる特徴を示す。

同じ民族でも、異なる文化背景を持ち、家族の形式も同じではない。伝統文化の影響を受けて、大多数のウイグル人の家庭の中で夫が支配権を持っている。妻は家庭の中で従う立場になる。それでは、ウルムチ市のような比較的開放的といえる都市で民考漢は理想の家庭像についてどのような考え方を持っているのだろうか。

調査によると、多くの民考漢は家庭の大事なことについて夫婦で相談して決めるべきだと考えている。家事も夫婦両方で分担すべきであるとする。これはウイグル人の伝統的な概念とは大きな違いがある。彼らの考え方は現代的といえる。夫が家庭のことを決定すべきだと考える民考漢の数は民考民より多い。一割近くの民考漢の中では伝統観念が相変わらず幅をきかせている。夫が家庭のことを決定すべきだと考える民考漢一八人のうち、一五人が男性で、三人が女性であった。古い家族関係を守ろうとする男性が多いのがわかる。妻が家事をすべきだと考える一五人のうち、一二人は男性であった。男性の中ではかなりの者が、妻が家事をすべきだと考えているのがわかる。

3 再婚、結婚前に貞操を失うことへの態度

アンケート調査によって、大多数の民考漢は再婚に対して理解ある態度を示している。再婚に対して全く否定的な態度を持つ民考漢は一〇・八%のみである。民考漢の中でこの問題の回答を避ける人はいなかった。これに対して、民考民では二九・四%の人だけが再婚に対して理解ある態度を示している。半分の人では再婚に対して完全に否定的な態度を持つ。四・九%の人

はこの問題への回答を避けた。⁽³²⁾ 民考漢の再婚への態度は民考民とは明らかに違うのがわかる。

民考漢の中で、結婚前に貞操を失うことに対して絶対に受け入れないと考える人は三四・九%である。受け入れないと考える人は三六・一%である。受け入れてもいいと考える人は一七・五%である。しかし、民考民の中で、結婚前に貞操を失うことに対して絶対に受け入れないと考える人は六七・一%を占める。受け入れないと考える人は二四・五%で、逆に受け入れてもいいと考える人は一・四%である。⁽³³⁾ 以上のデータから、この問題において民考漢は柔軟な考えを持っているといえ、民考民よりも開放的であるといえる。そして民考漢の家庭観から言うところ、民考漢は伝統的な面も開放的な面も持っているといえる。

四 ウイグル人と漢族の視点から見た民考漢

(一) ウイグル人の民考漢への評価と見方

民考漢と民考民はそれぞれ違う言語と教育環境の中で成長したので、自分の民族の風俗習慣、伝統文化に対する考え方と態度にもある程度のずれと違いがある。それでは、ウィグル人は民考漢に対してどのような見方をしているのだろうか。民考漢への評価について、上記の調査において個別インタビューを行った。同じデータを用いて、分析を加え、ウィグル人の民考漢への見方と評価をまとめた。

1 結婚観と配偶者選択に見るウィグル人の民考漢に対する考え

結婚観に関して、過半数のウィグル人は民考漢または民考民の結婚と同じように、配偶者を選択する時に民考漢を除外することはない。三分の一の人々が配偶者は民考民がよいと考えている。そこには二つの原因がある。一つ目は、大部分のウィグル人は子供の頃から民族学校に通っており、社会に出てから職場でも民考漢の数が少なく、全くない職場もある。彼らは民考漢と接触する機会が少ない。そのため配偶者は民考民にすべきだと考える。二つ目は、一部のウィグル人は民考漢と比べて風俗習慣、伝統文化に対する考え方と態度に相違があり、民考漢の生活と一部の考え方を受け入れることが難しいため、自分の配偶者は民考民にすべきだと考える。少数のウィグル人には民考漢に対して一定の除外する心理がある。

2 子供の学校選択に見るウィグル人の民考漢の見方

調査に回答したウィグル人の中では、子供を漢族学校より民族学校へ通わせたいと考える人数がわずかに多かった。ウィグル人はこの選択に対して、寛容で、傾向性がないのがわかる。どの学校を選択するかは個人と家庭の考えによって決まるので、年齢層によって選択が違ってくる。三〇〜三五歳の年齢層では、子供を漢族学校に通わせたい人が民族学校に通わせたい人よりかなり多い。それぞれ六五・七%と三三・三%の比率を占める。一部の人は子供を漢族学校に通わせたいが、自分の中国語のレベルが高くないことを心配し、子供の勉強の補習、監督

ができないため、民族学校を選んだと説明している。総じて言えば、既婚のウイグル人の中で子供を漢族学校に通わせたいという比率は、民族学校より多い。それぞれ四五・五%と三八・六%となっている。「母語は民族の重要な繋がりで、母語を失ったら、彼らの文化と種族のアイデンティティを失うことを意味する」⁽³⁵⁾。このような心配があるため、多くのウイグル人は子供の学校を選ぶ時に苦悩する。

ウイグル人が自分の子供のために民族学校または漢族学校を選ぶ理由は以下の通りである。

民族学校を選ぶ理由として三分の一は次のようなものである。(1)子供が自分の民族の言語と文字をよく知らないまま漢族学校に通わせると、家庭で子供にいくら母語を話させようと厳しくしつづけても、また、ウイグル語の本を読むように教育をしなくても、子供たちの毎日学校で受ける教育が中国語になつており、クラスメートの大多数が漢族の子供で占められているため、子供の母語のレベルがますます低くなる。性格の変化についても心配である。そこで、子供を民族学校に通わせるようにした。また、(2)民族学校より漢族学校は宿題が多すぎる。学生の負担が重すぎる。結局、中国語は第二言語として子供へのプレッシャーが大きい。これは順調に子供が育つにはマイナスの影響があると考えられるため、民族学校を選んだ。

漢族学校を選ぶ理由として、(1)多民族で構成される中華人民共和国では、中国語と漢族の文化は国の主流の言語と文化である。よって、子供を漢族学校に通わせれば、将来、利点が多

い、と大多数の人はこのように考えている。さらに五分の一近くの人は、(2)自分は勉強と仕事の時、中国語のレベルが低いことによる苦労を経験してきたため、子供を漢族学校に通わせることにし、(3)民族学校の教育の質があまりよくないので、子供をよい大学に入らせるために漢族学校に通わせることにした、という。

3 ウイグル人の視点から見た民考漢と民考民の違い

圧倒的多数のウイグル人は民考漢と民考民に違いがあると考えている。それは以下の五点にまとめられる。

(1) 民考漢と民考民の主な違いは自分の民族の文化への理解である。民考漢の自分の民族文化への理解は家庭教育と家庭文化の影響で獲得したものであるが、漢族の文化への理解は標準的な学校教育を通して獲得したものである。民考漢の自民族文化への理解は漢族の文化に対する理解ほど深くないと一部のウイグル人は考えている。

(2) 民考漢と民考民の主な区別は自分の民族への感情にある。人間は言語を通してコミュニケーションを取る。大多数の民考漢の母語の表現力は中国語に及ばない。彼らは中国語または母語と中国語を混合してコミュニケーションするのがもっとも便利だと感じる。彼らが自分の民族のメンバーと密接な交際をするのは大学に入ってからまたは社会に出てからのことである。学生時代の民考漢はウイグル人より漢族との交際のほうがずっと頻繁である。したがって、三分の一近くのウイグル人は両者の主な違いは自分の

民族への感情にあると考えている。

- (3) 民考漢と民考民の主な違いはそれぞれ違う民族やコミュニティとの生活と仕事に対する適応力にある。民考漢は中国語に精通して、漢族の文化もよく知っている。彼らは双語人で、文化の面においては適応力が強いと一部のウイグル人は考えている。

- (4) 民考漢と民考民の主な区別は中国語と漢族の文化への理解と受け入れにある。一部のウイグル人は民考漢は中国語と漢族の文化への理解と受け入れる能力が民考民より優れていると考えている。

- (5) 民考漢と民考民の主な違いは知識の広さと深さにある。今のところ、民族教育は遅れていて、学校教育の質がよいとはいえない。ウイグル語の授業以外での読み物、参考書が少ない。民考漢の情報量は民考民より大きい、知識面も民考民より有利であると考ええるウイグル人もいる。ただしこれは一概には言えない。

4 ウイグル人の民考漢への評価

- (1) 民考漢は自分の民族の言語と歴史、文化を習得できれば、現在の社会で役立つ人材となると考え、また、このような民考漢は自分の民族の社会でも威信が高く、人気がある。半数のウイグル人はこのような人こそ本当に有能な人材だと考えている。

- (2) 民考漢は現代社会の中で最も人気がある。民考漢は中国語に精通している。そして漢族の文化をよく知っているた

め、就職そして昇進する際に、民考民より競争力があると考えるウイグル人もいる。

- (3) 一部のウイグル人は民考漢の生活と特定の問題への見方を受け入れがたいと考えている。彼らは民考漢と自分の民族の一部の風俗習慣、伝統文化に対する態度にしばしば相違があるので、互いに相手の見方と態度を受け入れがたい。

- (4) 母語能力が低い民考漢ときには自分の民族社会で受け入れられないことがある。さらにコントや笑い話の中に登場して、風刺と批評の対象となってしまう。少数数のウイグル人は自分の母語さえ知らない民考漢は本当のウイグル人とは言えないと考えている。このような極端な見方もある。一部の民考漢の母語能力は低いし、母語文化への理解も深くないが、あくまでウイグル人であり自分の民族へのアイデンティティという点では民考民に劣ることはない。

- (5) 自分は民考漢とは何の違いもないと考えている。これは、民考漢と自分と区別する民考民とは違った考えの民考民であるウイグル人もいるということである。さまざまな考え方があり、一概には言い切れない。民考漢と自分とに違いが存在すると考えているウイグル人民考民もいれば、何の違いもないと考えている人もいる。

(二) 漢族の民考漢への評価と見方

民考漢は子供の頃から漢族学校で標準的な学校教育を受けて

おり、漢族の言語文字、漢族の文化に詳しい。漢族との交際においては言語による障害は生じない。漢族の見方、巨視的な評価が民考漢には影響を及ぼす。それでは、漢族の民考漢への見方はどのようなものか。どのように民考漢を評価しているのかについて、上記の調査において行ったアンケートとインタビューのデータを再分析する。

1 漢族と民考漢の関係

アンケート調査を行ったほとんどの漢族は、日常生活、仕事、勉強とあらゆる場面でウイグル人と触れ合っている。自分が通う学校のクラス、または自分の子供のクラスには民考漢の同級生がいる。

調査結果から、漢族は民考漢とは仲がよい。仲がよくない、または民考漢とは全く交際しない人はわずかである。民族間で交際するには、言語は重要である。言語が流暢でなければ交流の支障になったり、または交流が難しくなったり、互いの関係に影響を与えたり、さらにわだかまりが生じたりすることがある。もし交流する相手が自分の言語を流暢に使用できれば、親近感が生まれ、コミュニケーションしやすくなる。よい人間関係を築くことに繋がる。

2 漢族の視点から見た民考漢と民考民の違い

ほとんどの漢族は民考漢と民考民は違いがあると考えている。主に以下の四点である。

- (1) 知識の深さと広さ。民考漢は小さい頃から漢族の文化教育を受けてきた。漢族学校の教育の質は高い。それに比べ

ると少数民族の学校教育は遅れている。民考漢の扱うことができる情報量は民考民より大きいし、より広い知識を知っている。

- (2) 中国語と漢族の文化に対する理解と受け入れ。民考漢の中国語と漢族の文化への理解の促進は正規の学校教育で行われている。民考漢は民考民より中国語と漢族の文化への理解が深い。学校教育で知らず知らずに影響を受けて漢化され、漢族の文化は彼らの文化的な観念の中に深く立ち入っている。彼らは漢族の文化について違和感を感じる心理的抵抗が少ない。

- (3) ウイグル人コミュニティと漢族コミュニティにおいて適応できる。民考漢は小学校からずっと中国語で基本的な科学や文化知識を学んできた。彼らは絶えず漢族の文化的な影響を受けてきている。文化的な触れ合いの中、適応能力が高く、新しいことを受け入れることにも柔軟である。

- (4) 自分の民族への感情または自分の民族の文化への理解。大多數の民考漢の自分の民族の歴史、文化への理解度は、漢族の文化ほど深くない。

3 漢族の民考漢への評価

- (1) 少数民族の子供を漢族の学校に通わせることは少数民族の人材育成のルートになっている。特に科学技術面の人材については漢族学校の教育が重要となる。現在、漢族学校の教える質と効果とともに民族学校より高い。子供を漢族学校に通わせるのが社会発展によりよく適応する人材を育

成するルートだと考えている。

- (2) 民族間のわだかまりを取り除くために役立つ。民考漢は漢族と触れ合う時に言語の妨げがなく、文化的、また心理的な障害が小さい。互いに意思疎通が容易である。

- (3) 民考漢は少数民族の中よりよい人材である。彼らは自分の民族の言語、文化に精通しているだけでなく、漢族の言語、漢族の文化もより深く理解している。それらの能力や知識を生かせることができれば、現代の多民族社会の中で、自分の才能をよりよく発揮することが期待できる。しかし、すべての民考漢が少数民族として活躍できる人材とは言えない。

- (4) 民考漢は現代社会で人気がある人材である。少数民族に對して、中国語のレベルが高いので、就職に有利に影響している。中国語に精通して、漢族の文化をよく知っている少数民族は社会の需要が高いと考えている。

- (5) 民考漢は中国語のレベルが高いが、自分の民族の言語文字、歴史と文化についての知識は不十分なので自分の民族との交流には不利である。

- (6) 子供を自分の民族の文化から離れさせることになるので、子供を漢族学校に通わせるのはよくないという考え方を持つ人は少数にすぎない。実際に、民考漢は学校教育を通して、漢族の同級生と長い間触れ合うなかで、絶えず漢族の文化の影響を受けている。しかし、家庭の中では、自分の民族の文化的な空気が依然として強い。子供を漢族学

校に通わせることは自分の民族の文化から離れさせることに繋がるとは限らない。

つまり、漢族の視点から見ると、民考漢こそが少数民族の中の適切な人材に映るのである。現代社会の中でもっとも人気がある人材と考えている。彼らは中国語に精通して、漢族の文化をよく知っていると同時に、自分の民族の言語文字を知り、自分の民族の歴史と文化もよく知り、それこそ現代社会でもっとも理想の群体になるだろう。

(三) ウイグル人と漢族の民考漢への評価の違い

民考漢と民考民の違いは、主に自分の民族への感情と自分の民族の文化への理解にある、と多くのウイグル人は考えている。漢族はその反対で、習得した知識と漢族文化への理解と受け入れにあると考えている。このように違った見方が生まれた理由としては以下のようなものがある。

- (1) 民考漢は小さい頃から漢族学校で勉強し、中国語を通して基本的な文化や科学知識を学んでいる。彼らの中国語のレベルは高いため、文化の面では漢族の文化から多方面にわたって影響を受ける。同時に、家庭と家庭の文化の影響を通して、自分の民族の文化の影響も受けてきている。彼らの弱点としては母語のレベルが高いとは言えないことがある。半数の民考漢の母語のレベルは、会話での表現のみに留まっている。自分の民族の言語文字を読めないし書けない。ある程度よりよく自分の民族の文化を理解するには妨げとなる。自分の民族の文化への

理解は民考民に及ばず、漢族の文化への理解にくらべると深いとはいえない。時に彼らは自分の民族の文化とはある種適応しないところもある。

(2) 大多数の民考漢に対しては、交流する際に中国語または母語と中国語を混合して使うのが最も便利である。彼らは自分の民族の人と交流する時でも自然に中国語を話す。これが一部のウイグル人には違和感を感じさせて、彼らは母語への言語感情が深くないという考えを導いた。他に民考漢は自分の民族の人と密接に触れ合うのが大学に入ってから、または社会に出て後のことである。学生時代に民考漢は自分の民族より漢族と頻繁に触れ合ってきた。同時に自分の民族社会の色々な活動に参加するのも民考民より少ない。一部のウイグル人は民考漢があまり自分の民族の人と触れ合いたくない、そして、自分の民族への感情が強くないと考えるようになった。事実は違っており、一部の民考漢は小学校と中学校での学校生活の範囲が狭いため、多くの漢族の子供とは触れ合ったが、自分の民族の子供との触れ合いは少なかった。年齢が増し、交際する範囲が広がるにつれて、彼らの民族感情はますます強くなっていく。全体的に彼らは自分の民族への感情において民考民とはあまり差がないと言える。

結 び

現代中国では、漢族の文化が主体的な地位を確立しており、中国語の重要性が顕著になるにつれて「民考漢」という社会的

群体が誕生し、発展してきた。そこには、社会、文化および教育制度が背景として存在する。民考漢の誕生は、先の世代によって決められたことによるものであり、政策もその発展を後押しする方向となっている。民考漢は、漢族の言語に精通していて、漢族の文化への理解が深く、新しい情報を、より速く、より多く受け入れることができる。民考民に比べると、文化的な適応に優れ、知識も豊富であるため、実際の業務能力も高い。そのため、社会において民考民よりも競争力をもつ群体として受け入れられている。ウルムチ市では、各領域の民考漢の中から、各学科の博士課程や修士課程の院生、教師、医者、科学研究者、高層指導者、企業家などかなりの数の人材が勢いよく現れている。彼らは中国語を通じて視野を広げ、豊富な知識を得ることによって、自民族の文化の発展と繁栄に貢献している。しかし、彼らは母語のレベルがあまり高くなく、自らの少数民族社会の内部において、自分の才能と潜在能力をよりよく発揮することは難しい。全体的にいえば、大多数の漢族とウイグル人は民考漢を受容している。しかし、言語の問題、自民族との触れ合いが少ないなどによって、一部の人は民考漢には偏見を持っている。最も重要なことは、一部の民考漢自身には心理的な障害があつて、自分にも他人にも上手く接することができず、自分の民族の社会的群体にうまく溶け込めないで、孤立していると感じていることである。この問題に対処するには、民考漢にとって、中国語に精通すると同時に、母語も十分に習得して精通することが重要であることを認識する必要がある。

中国語だけではなく母語も習得することで、自分の潜在能力と優位を充分に発揮する人材となりえ、心理的な障害を克服して、新疆社会の発展、自分の民族社会の発展を推し進めるように貢献していく人材になることができるはずである。また、中国社会も民考漢の課題に注意を払い、彼らにもっと関心をもつて、理解していかねばならない。

〔謝辞〕 本稿の執筆にあたっては、リズワン・アブリミティ氏と張玉梅氏から貴重な助言をいただいた。深く感謝する。

注

- 〈1〉 『中国統計年鑑 2009』 [2009: 23]。
- 〈2〉 同右。
- 〈3〉 リズワン・アブリミティ [2010: 44]。
- 〈4〉 自治区党委人民政府印発「關於大力推進“双語”教學工作的決定」即新党発二〇〇四年、二号文件。
- 〈5〉 この歴史的プロセスと背景については、リズワン・アブリミティの「中華人民共和国成立後の新疆における「民族学校」の漢語教育をめぐる一考察」に詳しく述べられているので、こちらを参照されたい。
- 〈6〉 高等学校の新入生を募集するテスト、全国統一の大学入学試験。
- 〈7〉 李曉霞 [2000: 96]。
- 〈8〉 希日娜依・賈蘇提 [2001: 2003; 2009]。
- 〈9〉 ここでは、カザフスタンにおいて小さい時からロシア語学校に通うカザフ人のことを指す。
- 〈10〉 政策的側面における漢語教育の理念とその実施状況の変容

に関わるプロセスの詳細については、リズワン・アブリミティ [2010] を参照されたい。

- 〈11〉 ウイグル語と普通話（中国語）のバイリンガル教育。
- 〈12〉 『烏魯木齊統計年鑑 2009』 [2009: 62-63]。
- 〈13〉 「全国高等院校招生統一考試」。
- 〈14〉 崔師憲 [1998: 33; 391, 429]。
- 〈15〉 希日娜依・賈蘇提 [2003: 166]。
- 〈16〉 奧邁尔・地木拉提 [2001: 826]。
- 〈17〉 『新疆教育年鑑 1949-1989』 [1991: 78]。
- 〈18〉 「新疆教育史稿」馬文華 [1998: 190-191]。
- 〈19〉 「新疆教育史稿」馬文華 [1998: 235]。
- 〈20〉 新疆維吾爾自治區招生委員會辦公室編 [1998: 151, 187, 215, 224, 335]。
- 〈21〉 黃家慶 [1997: 218]。
- 〈22〉 新疆は天山山脈により北疆と南疆の二つに分けられる。天山以北の地域が北疆、天山以南の地域が南疆と呼ばれアक्स、カシユガルとホータンなど三つの地域を含む。
- 〈23〉 李曉霞 [2000: 96]。
- 〈24〉 丁文楼 [2002: 212]。
- 〈25〉 希日娜依・賈蘇提 [2001: 62]。
- 〈26〉 ウルムチの幼稚園では、子供が入園後、年齢によって、大班、中班と小班に分けられる。幼稚園によって、ウイグル人と漢族の子供がそれぞれ違うクラスに入る幼稚園もあれば、民族に関係なく、すべてのクラスに色々な民族の子供が入っている幼稚園もある。幼稚園の教諭は主に漢族で、一部に少数民族の教諭もある。
- 〈27〉 この双語はウイグル語と中国語を指す。
- 〈28〉 坂元・希日娜依 [2006: 75-76]。
- 〈29〉 張偉 [1988: 56]。

- 〔30〕 万明鋼 [1997: 76]。
 〔31〕 張偉 [1988: 58]。
 〔32〕 希日娜依・賈蘇提 [2003: 172]。
 〔33〕 希日娜依・賈蘇提 [2003: 172]。
 〔34〕 希日娜依・賈蘇提 [2009: 73]。
 〔35〕 万明鋼 [1997: 77]。

参考文献

〔中国語〕

- 中華人民共和國国家統計局編 2009 『中国統計年鑑 2009』中国統計出版社。
 烏魯木齊市統計局編 2009 『烏魯木齊統計年鑑 2009』中国統計出版社。
 新疆教育年鑑編委會編 1991 『新疆教育年鑑 1949-1989』新疆教育出版社。
 新疆維吾尔自治區招生委員會弁公室編 1998 「新疆招生二十年」(普通高校、一九七七一—一九九七)、内部資料。
 崔師憲 1998 「招生計劃体制的改革与發展」新疆維吾尔自治區招生委員會弁公室編『新疆招生二十年』(普通高校、一九七七一—一九九七)。
 黄家慶 1997 『新疆民族学校教育研究』新疆人民出版社。
 馬文華 1998 『新疆教育史稿』新疆大学出版社。
 曹紅 1999 『維吾尔族生活方式』中央民族大学出版社。
 丁文樓編 2002 『中国少数民族双語教学研究与实践』民族出版社。
 張偉 1988 「論双語人的語言態度及其影響」『民族語文』一九八八年第一期。
 万明鋼 1997 「論民族教育研究中的双語問題」『教育研究』一九九七年第六期。

奧邁尔・地木拉提(オマル・ディリムラティ) 2001 「新疆的“民考漢”和哈薩克斯坦的“民考俄”」『二十一世紀——文化自觉与跨文化對話(1)』北京大学出版社。

李曉霞 2000 「兩難的選抉——对少数民族学生進入漢語授課學校的調查与分析」『新疆師範大學學報』二〇〇〇年第四期 九六頁。

李曉霞 2005 「新疆高校招生中的少数民族考生優惠政策分析」『新疆大學學報』二〇〇五年第一期。

夏里甫罕・阿布達里 1991 「新疆哈薩克“民考漢”青年亞文化浅析」『新疆大學學報』一九九一年第二期。

郭衛東・黄莉 2007 「新疆喀什地区中小學民考漢学生學業成績及影響因素分析」『民族教育研究』二〇〇七年第六期。

張興 2008 「行走于兩種文化之間——“民考漢”社會化問題解析」『新疆大學學報』二〇〇八年第一期。

米海古麗・司馬義(ミヒリグリ・イスマイリ) 2008 「維吾尔族“民考漢”之間語碼轉換功能分析」『語言語翻譯』二〇〇八年第四期。

祖力甫提・司馬義(ズリハヤティ・イスマイリ) 2009 「族群認同感建構的社會学分析——以新疆“民考漢”為例」『西北民族研究』二〇〇九年第三期。

希日娜依・賈蘇提(シェリンアイ・マソティ) 2001 「“民考漢”与双語現象」『語言語翻譯』二〇〇一年第一期。

希日娜依・賈蘇提(シェリンアイ・マソティ) 2003 「浅談“民考漢”的婚姻家庭觀念」『西北民族研究』二〇〇三年第二期。

希日娜依・賈蘇提(シェリンアイ・マソティ) 2009 「維吾尔族和漢族对“民考漢”的評價与看法的比較研究」『中国西部科技』二〇〇九年第三期。

自治區党委人民政印發「關於大力推進“双語”教學工作的決定」即新党發二〇〇四年、二二号文件。

〈ウイグル語〉

Abdikerim Rakman 1989 *Uyghur Folklori Haqqida Bayan*,
Shinjang Universiteti Nashriyati.

〈日本語〉

リズワン・アブリミティ 2010 「中華人民共和国成立後の新疆
における「民族学校」の漢語教育をめぐる一考察」『アジア・
アフリカ言語文化研究』七八号。

坂元一光、希日娜依・買蘇提（シェリンアイ・マンティ） 2007
「中国少数民族の言語と集団間関係の新局面——新疆ウルムチ
の「民考漢」を中心に」『九州大学大学院教育学研究紀要』第
九号。

藤山正二郎 2010 「ウイグル民族アイデンティティと民考漢の
将来」『福岡県立大学人間社会学部紀要』第一八巻第二号。

希日娜依・買蘇提（シェリンアイ・マンティ）、大谷順子 2010 「中
国新疆南部の農村地域におけるウイグル女性の教育情況に関す
る調査報告」『九州大学アジア総合政策センター紀要』第四号。